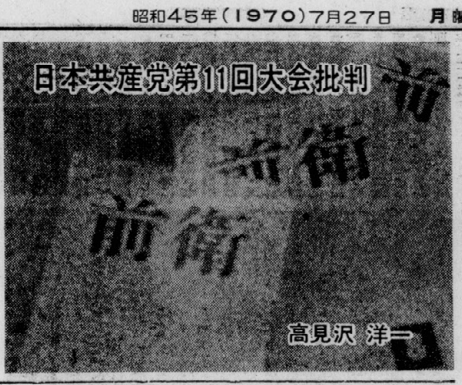
京都大学新聞
京都大学新聞社
京都市左京区吉田
京都大学構内
京都 ☎8111 学内2441
郵便 2054 直通
振替・京都3909
（1部20円）

東大への精鋭★国立文理の権威
東大国立ゼミ
京都新宿区高田馬場駅前中央

日本共産党第11回大会批判



高見沢　洋一

日本共産党は十月一日から七日間に亘る第十一回党大会において、五月の第十三回中央委員会で選択された大会決議案、規約改正案を内容的にほぼ同案があり選択した。

その七年代闘争の路線である「さしあたって民主・平和一戦線による民主主義革命へ」という人民戦線派の純化と西欧型共産党への個別の反プロレタリア的性格と労働者階級に対する飛躍を粉砕してゆくことはわれわれの一つの任務である。

今回は、日本共産党の総体的批判の一環を前全国委員連合書記局員の高見沢洋二氏に依頼した。（編集部）

〈はじめに〉

日本共産党第十三回中央委員会総会は、第十一回党大会の「大会決議案・規約改正案」を全員一致で採択した。そこは、今日世界の共産主義運動がつきあたっている深刻な諸問題は何一つ解決されなかった。

それだけではなく、この中央委員会総会と党大会とは、この「深刻な諸問題」を回避することをおして、七十五―七十七年にむけた七十年代前半の階級闘争の路線を放棄するだけではなく「民主連合政府樹立」の幻想をふりまく事をとおして、日本のプロレタリアートと人民を、完全に日本帝国主義とその国家機構に売り渡そうとしているのである。

日本の階級闘争が六十年代の合法闘争の時代から、半合法をおしてゆるやかに非合法化の時代へ移行しはじめている今の重大な時期にあたって、プロレタリアートと人民とはこれを奪回することを忘れ「民主連合政府樹立」から「人民政府」への闘争をおしつけようとしている。

プロレタリアートの国家権力の簒奪が、議会の赤いジュウタンの上を歩いて実現出来るとする思想は、議会主義・合法主義を、そのはじめから自らの政治が決定されているばかりか、プロレタリアートの階級的自覚をそのはじめから武装解除し、みじめな敗北へと導くものである。そして、この右翼日和見主義・修正主義・極左冒険主義、無政府主義を生みだし、何の系統的な理論的・計画もない暴動に対するプロレタリアートの期待を育てることによっても犯罪的なのである。

この議会主義・合法主義は、その「大衆的前衛党」をもって、この陽級的裏打りの一切の準備を終ったのである。

プロレタリアートの階級闘争と革命、そしてプロレタリアートの政府の樹立、暴力革命抜きには実現することは出来ないというマルクス・レーニン主義の原則は、今日においても変わることなく貫徹している原則である。

この原則をあいまいにし、曖昧にし、修正することが、これほど許しがたい、裏切り、犯罪であるかどれほどとりかえしのつかない政治的誤りであったか、ということは、ブロレタリアートの階級闘争の歴史が証明しているだけでなく、今日の日本の階級闘争が示唆している。

我々は日共共産党がプロレタリアートにしっかりとしようとしている「偽」を断固として党派闘争によって粉砕しなければならない。プロレタリアートの階級的覚悟を高め、プルジョアジーに対する限りない憎悪を組織し、帝国主義とその国家権力を、実力で覆すまで打倒し、破壊し、粉砕する準備に着手しなければならない。

1、民族共産党の確立

この間の国際共産主義運動はインドネシア共産党の壊滅に象徴的に示された中国共産党の「中間地帯論」の崩壊、ソ連と東欧諸国の対立、チェコスロバキアに対する侵略、そして、キューバを中心とする大陸革命の第三潮流の形成、そして、日本、西独、イタリア、フランス、イギリス等の帝国主義諸国における新しい革命党の合流と共産党の休眠内的本質の全面的露呈、そして、これら世界の階級闘争の矛盾を一身にあつめた、ベトナム戦争のインドシナ全域への拡大、等として党派闘争を進めざるをえない。

そして、この国際階級闘争は不可避的にきびしくなり、党・国家の内部の党派闘争、階級闘争を激化させずにはおかず、中国の「文化大革命」は、決して中国国内の内事情によって生まれたのではなく、この国際的な階級闘争の矛盾対立、闘争、第一の源泉をもってひきおこされたのであった。また、他方においては、ソ連共産党の第前の従来のブルジョア路線、「平和共存」路線もまた、根底からゆらぐことがおき、政権交替から、さらにグレムリン内部における内戦対立、闘争がおきていることはいえ、社会の全面的にわたる矛盾対立の激化を顕在化させられずにはいなかった。

そして、これらの結果とは、58年以降はじまった中・ソ論争を中心、ソ国際関係という事態と戦争をはらんだ対立へと発展させて来たのである。

このような国際階級闘争と国際共産主義運動の中における矛盾と党派闘争に対して、自然発生的に対応することはこれらの矛盾対立を激化させこそすれ、何の解決も与えはしない。

レーニン亡き後のロシア共産党内闘争の過程で一九二〇―三〇年代を通して自ら形成していたレーニン主義＝スターリン主義イデオロギー体制の確立とひきかえにコミンテルン＝世界共産党を自ら解散していった。これらの徹底した国際的党派闘争を闘い抜き、この党派闘争の過程によって遂行世界における階級闘争を世界革命闘争に転化させ、世界プロ独裁党に向って進化して行くべき世界党の建設が問われているのである。

日本共産党はいよいよ本格的に議会による多数派奪取「革命」にのり出したのである。

③、然し、階級闘争の展開は、決して非合法から合法へ向かっているのではなく、明らかに合法から非合法に向っているのである。

すなわち、六十年代の反政府闘争の時代に入りはじめたと言うことが、昨年四・二八闘争以来鮮明になってきて事態であると言わねばならない。

たしかに、社会党、民社党、公明党、そして自民党における田中、宇都宮、中曽根、小坂をはじめとする「二十一・ライト諸グループは「中間政府」、「連合政府」構想に基づいて動いているという。

然し、岸、佐藤、福田を中心とした自民党主流、及び三木を筆頭とする党内派閥（独自）主流は、東京三区から小坂を押し立て、公明、民社を刺激として議会対策をとりつつも、中心的には、警察、公安、自衛隊の強化、官僚の統制、司法権の統制、教育の統制、そして、自衛隊の強化をはじめとする憲法弾圧体制の強化、言論統制、司法権の統制、教育の統制、そして、自衛隊の強化、言論統制、司法権の統制、教育の統制、そして、自衛隊の強化をはじめとする憲法弾圧体制

昨年来、熾烈に闘われた京大闘争が〈敗北〉していった中で、そのもっていた学生の総反乱のエネルギーを、職能職域→地域闘争として持続化させるべく、淡路闘争委の運動は展開されてきた。70年6月闘争を経た現在、ブルジョアジーの全面的な政治社会秩序の帝国主義的再編の攻撃の中で、この攻勢と真に対決する運動の展開が要請されている。前回の本紙編集員の淡路に対する提起を受けて、今回は、淡路に闘争総括、今後の方向性を提起してもらった。（編集部）

職能・職域闘争から地域闘争への再編へ

淡路住民の「大長征」

地域闘争の全国的結合へ

その1

大長征において、我々がいかなる出会い持ちし、何を獲得したかについては、すでに機関誌「パルチザン」臨時特別号において明らかにしており、ここでは、水島君の問題提起をもとに情況七月号論文のさらなる深化と、大長征を淡路の一連の闘争の流れの中で明らかにしてゆく事を提案したい。

一、水島君の報告（京大新聞七月十三日号掲載）に寄えて

——「職能・職域闘争→第二次全共闘学生反乱を準備せよ」

我々が「職能・職域闘争」を提起したのは、第一次全共闘学生反乱の展開してゆく限界を運動として突破すべく為であった。

第一次全共闘運動が戦後学生運動、否、全政治史の中において明確な転換点を作り出し得た質は、それがまさに「反乱」として様々の特質を持っていた点にある。第一に、その攻撃的な質において既成学内権威を完全に失墜せしめ圧倒した事、第二に学内権力を転覆し得た事、第三に、東大決戦を転換点としつつ、かかる闘いを明確に研究・教育の帝国主義的再編に対する闘いとして意識的な運動形態を獲得しつつ、攻撃的な質でもって全国化を勝ち取り、一時的ではあれ社会の一局面を完全にマヒ・解体させたいという点にある。

かかる反乱の自然発生的出発点に対し、その自然成長的弱点は、七〇年安保闘争という政治情況の中において、直接的に克服されなければならなかった。これが九・五における八派全国全共闘連合の結成である。かかる方向での全共闘学生反乱の集約は、部隊・軍団的集約として以上の全国全共闘を生み出し得ないのは当然である。

溝田パルチは出発点を学生大衆反乱に設定しつつも、根拠地をとられ切れなかったが故に、実はかかる八派全共闘と同じ位置でしか第一次全共闘運動を集約仕切れるものでない事は明らかであろう。

では、第一次全共闘学生反乱はいかに集約され、展開されべきなのか。それは第一次全共闘運動の継承的基礎、それに関わる学生の主体的変革を再度分析し、すでに萌芽としてありながら、国家権力による暴力的に全面的に圧殺されていた闘いの中に、再度結集軸を見出し、戦列の再編を図る事である。

現在進行する大学の再編は、海外侵略を準備する日帝の人民に対する帝国主義イデオロギー攻勢の一環としての教育・研究の再編であり、それを保証する管理・運営に対する攻撃であると共に、同時に、生産過程において進行する経済再編（合理化、国土再編、農業再編）の上部としての科学・技術の再編、見合う大学の教育・研究の内容の再編である。

学生主体にとって、かかる過程は、一方における、ベトナム解放闘争を変換とする反戦・反帝闘争、とりわけ六年十月以降の政治過程の生み出した状況に直接関わることであり、一方における安価に大量に生産されつつある労働力としての学生たる目に、神聖な「学問」という幻想を取り払われ、より官労働に近接した位置にある自己の覚醒である。

かかる状況に総体として闘わるものとしては、第一次全共闘学生反乱の得た内容と形態は、明らかに不十分、不均等なものであった。第一次学園闘争が主要に獲得したものは、大学の解体を総体としてめざしつつも、教育・研究の管理をめぐっての自己管理闘争という内容で、それに伴なう形態は、バリケード封鎖闘争である。

現在の大学機能の一時的で、解体に対して、第二次全共闘学生反乱はまるかに攻撃的なものとして、下部経済再編の環へ向けてのパルチザン戦の展開を背景として、大学という場における研究・教育の内容の全面的な解体作業を大衆的な結集軸として、学生、研究者の階級的再編を勝ち取る闘いである。

学生主体にとってこの闘いは、価値創造の為の抽象的労働を担うものとして教育されつつある学生という存在にとって、具体的労働を獲得してゆく全人的な作業の一部である。

よって、この闘いは、本質的には虚偽のものでありながら、形態においては具体的な労働（医療、建築、農業等）を前提とする学生という具体的な存在を根拠として大衆的反乱を方向づける。

さらに、かかる虚偽のものである進化する領域としての労働の具体的イメージを与え学生としての存在の中に見出す事の出来ない学生に、第二次全共闘運動は、社会的実践・労働を通じて自己の「全国地域闘争シンポジウム」の発行の具体化。

六月大長征により、三里塚、砂川、北富士、富士、との結合をはかったわれわれの試みは、具体的に次の成果となって大きく発展した。

第一に、六・二〇「第一回公害闘争シンポジウム」の成功と全共闘学のシンポジウム

六月大長征からもたらされたわれわれは、六月二〇日に「第一回公害闘争シンポジウム」を開催、六時間余りの討論の結果確認された我々の闘争の任務、問題点を全国約三〇〇ヶ所の労働者・学生に向けて次のアピールを送った。

——第一回公害闘争シンポジウム京都よりのアピール——

①全国の学友諸君！労働者諸君！京大における闘いの現状、各学部（法・経を除く全ての学部）ストに12月、三年次生の結集によって、全学大闘争長期ストへ突入として巨大な流れを形成し、大衆的な全国闘争への合流をはかり、その中で、①再度の全共闘以上の大衆的総括②70年代階級闘争における学生、研究者の先兵としての任務追求して来た。

我々はこの作業が、単に頭の中で、観念の領域であれこれと総括をし、展望を語っても一切なし得るものではなく、基本的に68～69年の全共闘Mの過程の中に生み出され、成長してきた諸問題の実践的な場、また実践の実践闘争の理論、及びこれらの理論的な検証の作業であるとの理論の下に、昨秋より実践的に地域闘争を担っている部分、及び研究者として地域闘争に運帯していこうとする部分より問題提起として、第一回公害闘争シンポジウムを開催した。

義は、六・安保闘争として高度な自然発生性を示した我々の闘いが、70年代階級闘争としていかに展開されるのか、という課題、つまりある側面において全共闘Mの質をそのまま再生産したものとしてしかあらわれ得なかった6月闘争の質をいかに止揚させるかという課題に明確な問題提起を行い得たということであろう。

討議を通じてわれわれは、われわれの闘争の任務、問題点を以下のように確認した。

(1) 現在の帝国主義的な大学再編は単に教育の再編であるのみならず同時に下部における経済再編による闘争の質の変化であり、つまり官労働の再編であるのみならず同時に下部における経済再編（産業合理化、農業再編、国土再編等）の上部における研究、教育内容の再編である以上、われわれの闘いは単に学内権威、国家権力との管理運営をめぐってのみならず、これらの経済再編に対する人民の闘いそのものの一部であり、これらの闘いと結合していく必要のあるとし、即ち全共闘はまさに発展の極限において、職域、職能へ闘いの領域を拡大していく必要があること。

(2) 現在の学内の制に組み込まれたこの研究者においては、その存在自身のもつ犯罪性をみしめながら主体的な「研究者」として、人間として生きるために自己の職域職能での闘いとして

(3) 以上をふまえて、我々はできるだけ早期に、「全国地域闘争シンポジウム」を開催し、地域闘争を組織わんとする国の学生、研究者、労働者、市民と地域闘争の質的発展に向けて討論を深めたいと考えている。

さらに全国で闘われている地域闘争の情報交換の場、地域闘争論を構築する場として定期刊行物の発刊を予定していこうと報告し、全国の闘う諸君へ結集と支援を呼びかけた。

②淡路島住民による「大長征」

七月初旬、淡路住民反対同盟は、六月のわれわれの大長征と同じコースで、三里塚、砂川、北富士との結合をかちとった。先日の現地闘争報告の中でもふれたように淡路島の現状は反対同盟の中で、三原町と芦べで従来の封建的な落の権力構造から今く切りはなされ、自主的な住民の盛りあがりとして結成されている淡路町の反対同盟は、われわれの六月「大長征」の報告を受けるの、たちに自ら淡路と、三里塚、砂川、北富士との結合を求めて飛びたっていたのである。まくの住民運動が、閉鎖的な枠の中にとどまり、他との結合をむと拒否している中で、淡路町住民のこの「大長征」の中で学生、「京都からのアピール」で全国に訴えた「第一回全国地域闘争シンポジウム」と「月刊地域闘争」発行の計画を、あくまで地域住民自のものとして、一挙に具体化することは節点として「地域闘争運動者連合」を六月二〇日をもって結成し、地域住民の闘いと運帯していくこと。

③「第一回全国地域闘争シンポジウム」開催と、「月刊地域闘争」の発行

④その他

編集は各団体よりの代表者によって行う。A1-5判、一〇〇ページ。発行、販売は「ロシナンテ社」

第一回全国地域闘争シンポジウム

①目的

地域闘争という領域における、あらゆる闘争の発展のための、情報交換、経験と理論の深化を目的とする。またこの雑誌は、地域闘争を担う全ての闘争者、学生の全国的な連絡体制の確立、各領域ごとの経験の集積と、全国的な地域闘争の運動の深化。

②目的

「月刊地域闘争」の発行に伴う全国のあらゆる地域闘争の運営体制の確立。

③目時、場所

6月8日（土）～9日（日）

東京都立川市　立川労政会館

会場、宿泊の準備の都合上、まるって参加し教連絡されたい。京都からはバスで行くので希望者は連絡すること。（30日まで）

連絡先　淡路闘争委員会（内線四五三八）

淡路町民対同盟が「大長征」を行ってきた間、われわれ「地域闘争行動者連合」は数回にわたって東京に出かけ、全国シンポジウムの開催と月刊誌の発行を、東大都市工、砂川反戦壊行動隊等と共に行なっていった。

これらの計画は「京都からのアピール」の中でもふれたように、革命的左翼諸党が60年代の一面的な市民主義的政治から、70年代においては住民の全ての階級を対象とした全人民的政治を地域において展開する必要に迫まられており、現在の公害闘争、基地闘争、農民闘争等々としても、70年代のエンクローチャーとしてしえない部分はいまだ存在している。われわれの今回の計画は、これらの不足部分を前問題排除し、あくまでも、地域住民らのものとして具体化させていかねばならない。

今、われわれの計画に対して、長沼、三里塚、砂川、新島、北富士、横浜、淡路、富士、水俣等々の住民組織が全面的に賛同を示し、われわれと共に呼びかけ人として、これらの計画に主体的なとりくみを示しつつある。また学生、労働者の戦線の中からも、多くの賛同者が、これらの計画のもとに全国から結集しつつある。

「月刊地域闘争」発行と「第一回全国地域闘争シンポジウム」

農民、漁民、市民、労働者、学生、研究者のものであり、それらの人々の手によって作られる。

②目的、場所

6月8日（土）～9日（日）

東京都立川市　立川労政会館

会場、宿泊の準備の都合上、まるって参加し教連絡されたい。京都からはバスで行くので希望者は連絡すること。（30日まで）

連絡先　淡路闘争委員会（内線四五三八）

長沼、三里、砂川、北富士……と、京都からはバスで行くので、沖縄を初めとする淡路闘争に対しても犯罪的な役割を果たしてきた。（淡路においては、「民主的政治」の名の下に、西山ラインを出し、県の御用学者として登場している）

一方、革命的左翼の側でも、六月には、諸派のスローガンに「公害」が登場し、七月各全学連大会でも「公害」が討議された。しかしこれらの闘争の内部にも、地域住民闘争に対して「セクト・エンクローチャー」としてしえない部分が登場しえない部分はいまだ存在している。われわれの今回の計画は、これらの不足部分を前問題排除し、あくまでも、地域住民らのものとして具体化させていかねばならない。

一方、革命的左翼の側でも、六月には、諸派のスローガンに「公害」が登場し、七月各全学連大会でも「公害」が討議された。しかしこれらの闘争の内部にも、地域住民闘争に対して「セクト・エンクローチャー」としてしえない部分はいまだ存在している。われわれの今回の計画は、これらの不足部分を前問題排除し、あくまでも、地域住民らのものとして具体化させていかねばならない。

今、われわれの計画に対して、長沼、三里塚、砂川、新島、北富士、横浜、淡路、富士、水俣等々の住民組織が全面的に賛同を示し、われわれと共に呼びかけ人として、これらの計画に主体的なとりくみを示しつつある。また学生、労働者の戦線の中からも、多くの賛同者が、これらの計画のもとに全国から結集しつつある。

呼びかけ人

淡路空港反対同盟　代表理事　永井　満
横浜米軍物資反対同盟運営委員会　事務局長　芝山運一郎
三里塚、芝山連合反対同盟　委員長　戸村　一作
砂川基地拡張阻止同盟　副行動隊長　宮岡　政雄
長沼ミサイル設置反対同盟　委員長　馬場　栄治
東京新島　本村　広野　広
富士宮公害対策市民協議会　議長　田中　寿夫
北富士総草庵会　会長　渡辺喜美江
東京水俣病を告発する会　世話人　岡田　徹
地域闘争パルチザン　人民書店、不公害研、全国連
京大文部、地域闘争パルチザン（総闘、堺闘、尼崎闘）
東京大都市工院生分ループ、東大建築、全原連、東大学部
日大　都市研究会
砂川反戦壊行動隊、横浜市職反戦都市問題研究会、全国障教育労働者反戦連合
墨野高、吉村功（名大）

「月刊地域闘争」

第一回全国地域闘争シンポジウム

①目的

地域闘争という領域における、あらゆる闘争の発展のための、情報交換、経験と理論の深化を目的とする。またこの雑誌は、地域闘争を担う全ての闘争者、学生の全国的な連絡体制の確立、各領域ごとの経験の集積と、全国的な地域闘争の運営体制の確立。

②その他

編集は各団体よりの代表者によって行う。A1-5判、一〇〇ページ。発行、販売は「ロシナンテ社」

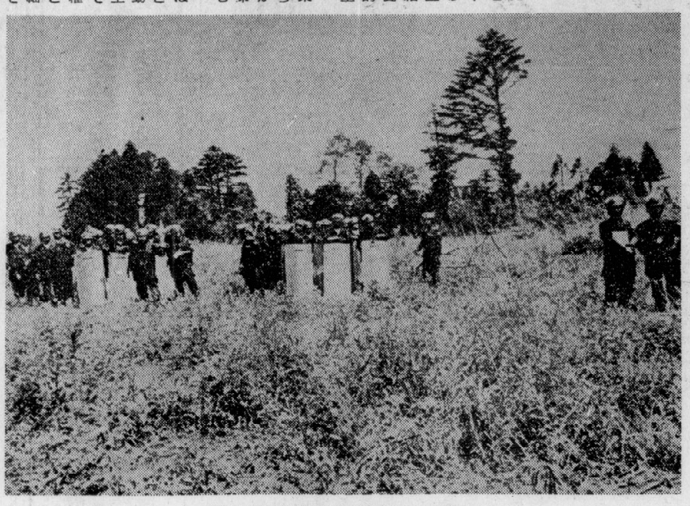
第一回全国地域闘争シンポジウム

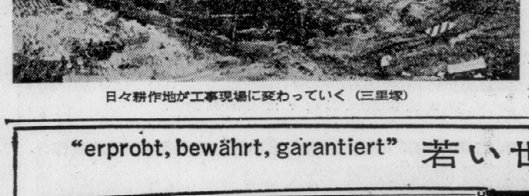
①目的

地域闘争という領域における、あらゆる闘争の発展のための、情報交換、経験と理論の深化を目的とする。またこの雑誌は、地域闘争を担う全ての闘争者、学生の全国的な連絡体制の確立、各領域ごとの経験の集積と、全国的な地域闘争の運営体制の確立。

領域の拡大へ

叛乱の持続化を


強制測量の時に現われた機動隊（三里塚）


日々耕作地が工事現場に変わっていく（三里塚）

"erprobt, bewährt, garantiert"　若い世代に贈る万年筆の最高峰…

3,000円より各種ございます

無条件で信頼出来る生涯の友
ドイツ製高級万年筆
MONTBLANC
モンブラン
お問合せは東京G.P.O.Box 1851 S宛

MBR
化学的に研究しつくされた最高のインク…各色揃っています。

序章【2号】
京都大学出版会
北海道大学出版会
▲発売中・300円
文学
1、短編〈顔〉……奥野　路介
2、ロマンの復活……稲垣　真美
≫武装蜂起≪
蜂起に関する覚え書……佐野　茂樹
パルチザン闘争……暉野　章
〈赤軍派〉から赤軍へ……八木　健彦
ラズルーカ(訣れ)抄……工藤　正広
〈身構える変革の視点〉
◇現代青年論……八木　俊樹
◇革命的サンディカリズム試論……大塚　雅也
◇女衒孝……池田　浩士

ひとりぼっちで淋しいとき……
おしゃべり仲間と会ったとき……
もちろん恋をしたとき……
静かでゴージャスな
純喫茶　ケルン
1F　761－4570　京・銀閣寺道電停前

レジャービル
銀閣のホトリ散歩して……
四人そろへば……唯だまって
意気の合う奴が集る……
廉価で魅力一ぱいで（コーヒーサービス付）
麻雀センター
ケルン
2F　761－1872
3F　761－3874

本格派……
おとな感覚とエレガンスな
フィーリングで
ユックリ楽しめる
高級ビリヤード

京都大学新聞【週刊】
定期購読
募集
購読料　1年分　550円
2年分　1,000円
郵送料　1年分　150円
▷お申し込みは郵送料を含めて郵便振替京都3909もしくは現金書留にて払い込んで下さい。
京都市左京区吉田京大構内
京都大学新聞社　TEL(761) 2054

ぼくたちに残されたコミュニケーションの
可能性に参加せよ！
◆　便利で廉価な定期購読を
購読料
1年分　550円
2年分　1000円
4年分　1750円
当社振替口座
京都 3909
（郵送料は1年分につき 150円）
学内唯一のマス・メディア
京都大学新聞
京都市左京区吉田本町京大西部構内
TEL075 (761) 2054　直通
075 (771) 8111内線2441